

大聖院：基礎情報と歴史

この広大な仏教寺院は、535 メートルの弥山の麓に位置し、真言密教の御室派に属しています。伝説によると寺は 806 年、弥山に登り真言宗の中心的な儀礼である護摩の火の儀式を含む様々な修行や儀式を行ったとされる真言宗の創始者、空海(774-835)により設立されました。空海が灯した残り火は、その後もずっと山で燃え続けているといわれています。

現在の大聖院は 12 世紀の記録に初めて見られ、宮島内または近くに壮大な寺院があったことが記されています。その寺の本堂は、宮島を訪れ、領土の平安と安寧を祈願するために訪れたことで知られる鳥羽天皇(1103-1156)の命令で建てられたと言われています。この出来事は、何世紀にもわたり続いた大聖院と朝廷の間の特別な関係の始まりとなりました。鳥羽天皇の息子の一人、覚性(1129-1169)は、皇室と非常に密接な関係を持つ御室派の総本山であり神聖な場所であった京都の仁和寺の寺主でした。覚性は父と同じように大聖院を好み、やがて寺院は大きな力を持つ仁和寺の末寺となりました。引退した高倉上皇(1161-1181)の 1181 年の宮島への訪問を記した文書では、大聖院を厳島神社の「管理者（寺院）」（注：別当寺）と表現しており、寺の権威ある立場を示唆しています。

大聖院は皇室の後押しを受け、16 世紀に仁和寺の主要末寺となりました。権力の最盛期には 12 の末寺を持ち、力を持つ多くの個人の鼻息を享受しました。そこには自らの旗の下全日本を統一した武将豊臣秀吉(1537-1598)が含まれますが、安定した政府が設立できる前に亡くなりました。

しかし、大聖院には苦難の時期もありました。明治天皇(1852-1912)が率いた新政府は 1868 年、近代ナショナリズムの手段として神道信仰を育む政策を開始しました。明治政府は神道と仏教の強制分離を命じ、日本で 1000 年以上にわたり持ちこたえてきた宗教的習合（注：神仏習合）の伝統を終わらせました。このような変化の結果、大聖院は日本各地の多くの寺院と同様、その土地や地位を大きく減らされることになりました。

大聖院は 1887 年、境内で火災により数棟を除くすべての建物が燃え落ちたとき、再び深刻な後退を経験しました。現在のお堂、門、その他の構造物はすべて、火災から数カ月、数年、あるいは数十年後に建てられたものです。大聖院の僧侶たちが空海の永遠の灯火を日夜見守る弥山の頂上では、長年にわたり自然災害を繰り返し経験しており、現在では一連の新しい建物を擁しています。頂上へは、メインのお寺(原文 main temple、本堂を指すものか不明) からハイキングコースをたどり、1 時間半で登ることができます。